

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 大量虐殺の記憶装置としてのミュージアム

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明石書店 公開日: 2018-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 関, 雄二 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00009058">http://hdl.handle.net/10502/00009058</a>

第2章 大量虐殺の記憶装置としてのミュージアム

関 雄二

SEKI YUJI

## 1 記憶の歴史化

グアテマラで起きた内戦、大量殺戮、民族浄化が、たとえ一部のインテリ層にとどまるとしても、いまだグアテマラ国民の記憶に止まっていることは、現地における夥しい数の出版物を見れば容易にわかる。とはいえ、和平協定が締結されて、十年以上経った現在だからこそ、語り、伝えることが可能になった事実もある。ある意味で、現在のグアテマラは、内戦時代の記憶のせめぎ合いや記憶の歴史化が進行している場といってもよい。

本章では、前章でリオ・ネグロ (Rio Negro) の虐殺と裁判を語ったフェルナンド・モスコソ (Fernando Moscoso) が携わった記憶の回復プロジェクトを取り上げ、その社会的意義を論じることにする。このプロジェクトとは、グアテマラ内戦下で最初の大量殺戮が起きたパンソス (Panzos) 市にコミュニティ・ミュージアムやモニュメントを建設し、周辺の村 (caserío) に暴力の歴史、土地闘争の歴史を記憶する装置を残した事業を指す。

## 2 パンソスの殺戮事件の時代的背景

### パンソスの地理的位置

パンソスは、グアテマラ中部低地のアルタ・ベラパス (Alta Verapas) 県に位置するパンソス市の拠点である (図1)。県庁所在地コバン (Cobán) 市は、首都のグアテマラ・シティーより車で五時間ほどの距離にある山間の都市だが、パンソスは、そのコバンからも東に一二七キロほど離れている。コバンに着く手前三〇キロほどにある分岐点を東に進めば、ポロチック (Polochic) 川沿いに低地が開け、やがてカリブ海につながる巨大な湖イサバル (Izabal) 湖にぶつかる。パンソス市は、この分岐道沿いの急峻な谷間が、その幅を広げ、イサバル湖の西に湿地帯を形成し始める、まさにその場所に位置する。目にする密林の存在は、この地が高温多雨の熱帯的環境であることを物語っているが、道路の両側には、その熱帯林を切り開いた牧草地や耕地が広がり、同時に開拓地であることも教えてくれる。分岐からの道路は未舗装で、四輪駆動車の使用が望ましいなど、アクセスは決して良くない。また、パンソスをそのまま通り過ぎ、東に向かえば、イサバル県のエル・エストル (El Estero) 市を経て、イサバル湖の東端を横切り、やがてホンジュラス湾、そしてその先のカリブ海へとつながるアマティケ (Amatique) 湾に面し

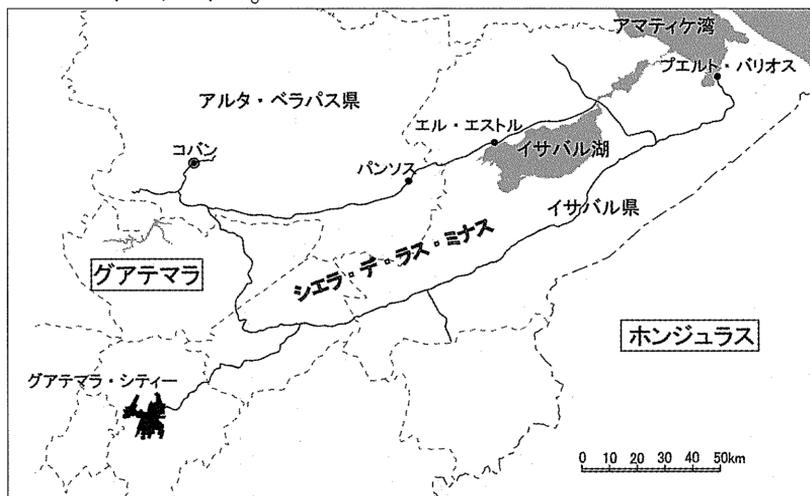


図1 パンソス市の位置

たプエルト・バリオス (Puerto Barrios) 市へとたどり着く。

いささか古いが、一九七三年の国勢調査によれば、パンソス市全域人口は二万五二六一人で、その九割以上がケクチ (K'ekchi) 系言語を話すマヤ系先住民である。なかでもパンソス市は、同名のムニンシピオ (Municipio) と呼ばれる行政単位 (市) の拠点として、一六四三人の人口を抱えていた。生業は、バナナ、コーヒ<sup>1)</sup>、そして米の栽培である。

このパンソス市で事件が起きたのは、一九七八年五月二九日のことであつた。この日、大農場フィンカ (finca) が不当に接収してきた共有地の返還を求めて、パンソス市役所前の広場に集まった七〇〇名とも八〇〇名ともいわれるマヤ系農民らに対して、グアテマラ国軍が発砲したのである。<sup>2)</sup> 関係者に対してインタビューを行った人類学者ビクトリア・サンフォード (Victoria Sanford) は、事件の数日前、フィンカの所有者、市長や役職者、警察署長が集まり、農民の抗議から自分らの利益を守るために、軍隊の出動を要請することを決めたという証言を得ている。<sup>3)</sup>

### 土地権闘争の歴史

共有地返還については、少々説明が必要になる。マヤ系先住民が暮らしていた今日のグアテマラ地域を征服したのはスペイン人であり、一五二四年のことであつた。征服者や植民者スペイン人は、先住民の土地を接収し、恐怖と強制力をもつて、先住民の労働力を搾取していった。スザンヌ・ジョナス (Susanne Jonas) によれば、その特徴は、少数の利権者が経営する大土地所有制であり、そこで栽培する作物は、宗主国スペインやヨーロッパ市場の需要を満たすための換金性の高いものに限られていたとい<sup>4)</sup>う。作物の種類

は、時代とともにカカオからインディゴ、赤色染料、着色料であるコチニール（カイガラムシ）などへ変化していったが、輸出品の種類は少なかった。この一次産品輸出という国外市場に依存した基本的な構造は、一八二一年の独立後にも当てはまる。変わったとすれば、宗主国スペインの影響下を脱し、イギリスの経済的介入が顕著化したこと、さらには輸出品の比重がコーヒーに移ったこと、支配階級にクリオーリョ（植民地生まれの白人）に加え、混血であるラディーノの一部が登場したことなどであろう。しかし、土地問題に関する変化は見過ごせない。コーヒー栽培は、より広い土地と低賃金労働力を必要とし、また輸送や港湾施設などのインフラの整備を喚起したからである。

とくに一八七一年の軍事クーデター後は、自由主義政策が進められ、教会の土地、先住民の共有地や私有地が接収され、フィンケロ（Inquero）と呼ばれる大農場主に再配分された。<sup>⑤</sup> パンソス市に関する文書はわずかだが、市が創設されたのは、一九世紀の前半から、ちょうどこの頃までの間であったと考えられ、この地も例外ではなく、市の共有地は、一八八八年に、ティナツハ（Tinaja）と呼ばれるフィンカに接収された。<sup>⑥</sup> パンソスが、まさにバナナやコーヒーを欧米に輸出するための重要なルート上にあつたことは、当時、唯一の国営鉄道が、ここに敷設されたことからわかる。

二〇世紀に入ると、こうした経済体制は、グアテマラ全土で強化された。一九三四年には、土地を持たない農民や先住民に対して、一年のうちで一五〇日を、フィンカでの労働、もしくは国の公共事業への参加にあつてゐることを強要する法律が制定された。また一九世紀後半から二〇世紀前半は、アメリカ合衆国の台頭の時期にあたり、イギリスの影響を排除しながら、次第に経済的かつ政治的進出を果たしていった時期でもあつた。グアテマラでは、バナナ栽培、鉄道、そして電力関係の企業が誕生し、米国市場をねらつた寡占体

制が築かれたのである。

### 十月革命と挫折

こうした状況に劇的変化が生じるのは、一九四四年のいわゆる十月革命である。<sup>⑦</sup> 少数の利権者による寡占体制、独裁的な政治に業を煮やした学生、市民が立ち上がった事件を指す。とくに改革の一環として、ハコボ・アルベンス (Jacobo Arbenz) 政権下の一九五二年に施行された農地改革法は、土地問題に大きな影響を与えた。少数の利権者の手にあつたフィンカなどの土地でも、未開墾地を国が接收し (低額ながらも補償金は支払われた)、農民や先住民の手に分配することを目的としていた。これにより十万人もの農民が恩恵にあずかったといわれている。しかもこの種の土地接收は、グアテマラ最大にして米国の企業、ユナイテッド・フルーツ・カンパニー (バナナ産業) や鉄道、電力経営企業なども適用された。パンスでも、農民運動が起こり、未開墾地は国に接收され、フィンカに搾取されていた農民に対して、終身用益権が与えられた。しかしながら、これはひとときの春にすぎなかつた。<sup>⑧</sup>

農地ばかりでなく、労働環境の近代化を目指し、労働者の結束や政党結成を許し、また米国資本による独占を防ぐため、港湾、道路、電力などさまざまな国家プロジェクトを急激に進めたアルベンス政権に対し、アメリカ合衆国が、東西対立の構図を持ち込み、政治的に介入したのである。アルベンス政権には共産主義のレッテルが貼られ、共産主義の勃興を恐れる他の中米諸国やグアテマラ国内での独占的利権を目指す内外の企業家、そして一部の軍人らは、米国 (CIA) と手を結んで、政権を転覆させたのである。一九五四年のことである。こうして改革の芽は摘み取られ、状況は元に戻ってしまった。

アルベンス政権のシンパは、共産主義者とみなされ、追放され、投獄された。労働組合は解散させられ、分配されたはずの農地は、零細農民から取り上げられ、再び少数利権者の手に戻されたのである。とくにユナイテッド・フルーツ・カンパニーの労働運動家や先住民リーダーに対する弾圧は激しく、わずか二カ月の間で、八〇〇〇人もの人々が殺されたと言われる。

アルベンス政権の崩壊後も、農産物などの一次産品の輸出依存の産業構造に変化はなかったが、品目の多様性は増した。こうした新産業を支えたのは、アルベンス政権下で誕生した新興ブルジョワジーであったが、政権崩壊後も、外資導入を積極的に進める親米的な新政権と歩調を合わせることに成功した。しかし、こうした外資依存体質は、産業に関わる一部の階層と農地の再接収を受けた貧困層との経済的格差を拡大させたことは間違いなく、土地を失った地方の貧困層は、農業で生計を立てていくことは困難になり、都市部や、綿やサトウキビ栽培が盛んな南海岸へ、契約労働を求めて移住していった。

#### 内戦の開始

こうした中で、グアテマラは、一九六〇年に、米国の要請を受けて、キューバと国交を断絶し、CIAによる反カストロ軍の軍事訓練を国内で許すようになる。これに対し、グアテマラ国軍内部でも不満が生じ、軍事蜂起未遂が起きる。クーデターに失敗したグループは、地方、とくに土地問題を抱えた東部地域に拠点を設け、やがて共産主義者らと組み、ゲリラ活動を開始する。これが近年までグアテマラ国内で見られた内戦の始まりとなるのである。もちろん、政府は、こうしたゲリラ活動に手をこまねいていたわけではなかった。政府は軍と秘密協定を結び、効率的なゲリラ撲滅作戦を展開する。こうして軍は、地方の村落に退役軍

人などを派遣し、委任官コミシオナードス (Comisionados) として住民の行動を監視させ、地方地主の權益を守った。また政府は、ゲリラ一掃のため、米国の特殊部隊グリーン・ベレーの派遣を受け入れ、具体的作戦の実施さえ許容した。米国がもたらした武器や作戦技術、そして思想は、グアテマラ軍の質の向上へとつながるものの、軍の政治的発言力が高まる中では、不当な暴力行使を許すことにはかつながらなかった。いずれにしても、多大の犠牲者を踏み台にしながらも、七〇年頃までにはゲリラ活動は沈静化していったのである。<sup>10)</sup>

一方で、政治の世界では極右勢力の台頭が見られ、この思想を背景に、非合法的な肅正を行う準軍事勢力も組織される。疑似軍は、正規軍とともに、農民活動家、労働組合幹部、左翼系知識人らの口を封じるテロ事件を次々と引き起こした。もちろん、地方で暮らす先住民らも、国や軍に反旗を翻せば、同様の仕打ちを受けたことはいうまでもない。

本論で扱うパンソス一帯でも、これまで述べてきたような十月革命後の政治、経済的変化をたどることができる。そこでは、一九六〇年頃から、一時期、革命派ゲリラが活動し、六三年には、市役所を占拠する事件も起きた。<sup>11)</sup>しかし、その後は、国軍が駐留し、むしろ軍の存在が目立つようになった。また六〇年代半ばからは、牧畜が拡大し、七〇年代には、パンソス周辺の市は、ニッケルや銅の鉱山開発に巻き込まれるなどして、住民は短期雇用労働の担い手として搾取されるばかりでなく、共有地のさらなる接収が続いた。こうした中で、大農場主フィンケローは、暴力を含む圧力、あるいは、非識字者である農民をだまして、契約書にサインさせるなど、非合法的に土地を獲得していった。

この間、パンソスの農民たちは、農地改革庁 (Instituto Nacional de Transformación Agraria; INTA) に訴

えるなどの努力を怠らず、一部の土地利用や暫定的所有権などが認められたが、合法的な土地所有が認定されたケースはない。例外として、後段で登場するカアボンシット (Caaboncito) 村においては、鉱山会社に接収された土地の一部が、農地改革庁によって、農民の手に返却されている。

いずれにせよ、暴力的解決を図ろうとしたゲリラ軍、そしてそれを暴力で押さえつけようとしたグアテマラ国軍、米国さらには疑似軍などがせめぎ合いをみせていた状況下で、土地回復の闘争を繰り広げていたパンスで虐殺が起きたのである。

### 3 パンススの虐殺と証言、そして秘密墓地の発掘

#### パンス広場での惨劇

歴史的背景の説明に多くを割いてきたが、改めてパンススの事件そのものに立ち戻ることにする。当時の警察署長エル・カンチェ・アシグ (El Canche Asig) にインタビュを行ったサンフォードによれば、事件前に開かれたデモ対策会議は和やかな雰囲気の中で行われ、しかも役職者の一人の誕生日を祝ったという<sup>⑬</sup>。事件の四、五日前には、一小隊の軍が到着し、市役所のサロンを占拠したとの証言もある。

アシグ元署長は、およそ八〇〇人の怒れる「インディオ」が市の中央広場に現れ、男性は山刀を振りかざし、女性はボールのような何かを握りしめ、その拳を高く振りかざしていた、と語っている(写真1)。また山刀には血のりがみられ、事前に妖術を彼らが執り行っていたとも推測している。アシグ自身は、抗議行動と妖術を恐れ、広場近くの建物に身を隠していたようだ。やがて、広場の周辺の建物の屋上に陣取っていた兵



写真1 パンソス市の広場。植え込みの後方に市役所がある。(関雄二撮影、2006年)

士が発砲を開始するのだが、そのきっかけは、「インディオ」の一部が兵士から機関銃を奪い取ったことであるという。もっとも、その人物は銃の扱い方を知らなかったらしい。やがて一斉に発砲が開始されると、「インディオ」らは、阿鼻叫喚の中、逃げまどった。発砲の後には三〇名ほどの遺体が残され、トラックに積んで墓地まで運んだが、二往復しなくてはならなかったという。また、抗議集会にゲリラの関与があったか、というサンフォードの問いに対しては、アシグは全面的に否定している。すでに述べたように、六三年の市役所占拠以来、国軍の駐留が拡大し、この地域でのゲリラ活動は認められなくなっていたから、というのがその理由である。

事件の一九年後にグアテマラ法人類学協会(Fundación de Antropología Forense de Guatemala, FAFG)が実施した調査によると、抗議に集まったのは、女性、男性、子供を問わず、またパンソ

ス市ばかりか、カアボンシット、セモコック (Semooch)、ルベルツル (Rubelzulu)、カングアチャ (Canguacha)、セパカイ (Sepacay)、フィンカ・モタグア (Finca Motagua)、ソレダ (Soledad) など周辺の村人であった(図2)。

当時、モスコソが代表として率いていた法人類学協会は、単に虐殺の犠牲者の遺体を発掘するだけでなく、どのような出来事がおきたのか、その証言を多数集めている。集会にしぼしぶ参加した女性(後に未亡人)らによれば、確かに人々は、手に山刀など持っていたらしい<sup>13)</sup>。

「私は、こわかった。だって彼らは手に山刀を持って叫び声をあげていたのですから」。(証言 No.1 1997/9/10 FAFG)

「彼らは、何かが書かれた赤い旗を持っていました。読み書きができないから、なんて書いてあったのかわかりませんでしたけれど」。(証言 No.15 1997/9/10 FAFG)

「女たちは、兵士に投げつけるために、石灰とトウガラシを

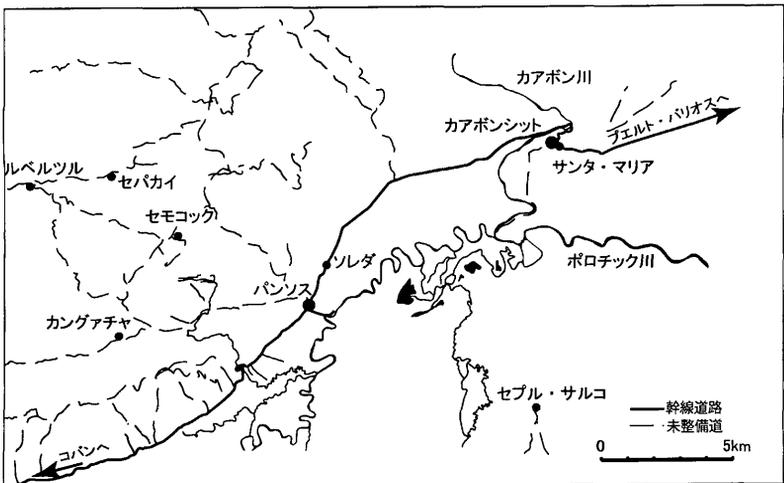


図2 パンソス市と周辺の村落

手に持っていました。私はなにも投げつけたことはありませんでした。でも女や子供たちは、皆、持っていました……。』(証言 No.12 1997/9/10 FAFG)

集会の目的は、土地の要求であったことは、証言のほとんどがこの点に言及していることからわかる。しかし、以下の証言に見られるように、この集会を組織したのが農民側であったのか、それとも意図的にパンス市長が呼びかけたのかは定かではない。

「私の亡くなった夫は、土地のことで来たのです。ほんの少しの土地が欲しかっただけです。」(証言 No.14 1997/9/7 FAFG)

「彼らは、以前から申請していた土地のことで来たのです。ちょうど儀礼を執り行ったばかりでした。要求が通るかと期待して来たのに。死にに来たなんて思いもしませんでした。」(証言 No.20 1997/9/7 FAFG)

「グアテマラ(首都の意)から書類が届きました。市長がその書類を持ってきたのです。私たちが土地を要求していることは、彼も知っていました。そこで、彼が皆に呼びかけたのです。「土地が欲しい者は来なさい」と。大々的な呼びかけでした。だからみんなやって来たのです。」(証言 No.1 1997/9/10 FAFG)

「朝早く、市長が私たちをよびつけたのです」。(証言 No.1 1997/9/20 FAFG)

ここでいう書類というのは、土地所有権の回復に関わる農地改革庁からの書類を指すらしいが、こうした書類が実際に存在したのかはわかっていない。集会参加者らの希望的解釈であったかもしれない。集会では、市長に要求を突きつけ、その直後に事件は起きた。午前九時頃であったという。もともと、市長がその場にいたかどうかについても、複数の矛盾する証言があり、判明していない。

「私はなにが起きたかこの目で見ました。市長のワルテルさんに一枚の書類が渡されました。私は、これまで三度にわたって彼と話をしてきました。彼は、この書類が気に入らなかったのです。腕を人々の方へ延ばすやいなや、発砲が始まりました。広場にはたくさんの方がいました。広場には一本の椰子の木があります。そこに身を隠しました」。(証言 No.1 1997/10/17 FAFG)

#### 土地闘争のリーダーハママ・マキン

多くの証言が集団の先頭にアベリナ・カアル (Abelina Caal)、通称ママ・マキン (Mama Maguin) とどうも女性がいたことを語っている。ママ・マキンは、スペイン語を操り、グアテマラ法人類学協会の調査でも、土地回復運動の女性リーダーとして、あらゆる人がその名をあげる人物であった。またパンソス一地域にと

どまらず、彼女の死後、ゲリラ側の機関誌においても愛国者として言及されている。孫娘にあたり、当日、祖母とともに集会に参加し、殺戮を目撃した孫娘マリア・マキン (Maria Maguin) に対して、モスコソが率いる N G O ^ 平和のための歴史化 (Historial Para la Paz) ^ が行ったインタビューの内容を抜粋すると次のようになる。<sup>(15)</sup>

「問題は、ほんの一握りの土地をめぐって起きました。首都からの一通の書類から始まったのです。書類を持ってきたのは、アベリナ・カアルの孫であるセバステイアン・マキンでした。そして集会で、農地改革庁の人たちに言われたことを皆に説明し始めたのです。セバステイアンは、「市長のところに行って、土地をもらえるように助けてもらえ」と言われた、と皆に語りました。

そうして、四つの共同体と会合を開き、市長のところへ行くことで合意しました。それから、月曜日に皆の中で活動的な人を捜し始め、私のおばあちゃんが代表となりました。というのももふつう男の人たちは、女の声には耳を傾けると考えたからです。しかし実際には、逆になってしまいました。……でも行く前に、なにも起きないように神に祈りました。それから市長になにを話すのかも決めておきました。というのも、彼らは、争うつもりなんかなく、ただ土地のため、それも子供たちのために、ほんの少しの助けを求めるだけだったからです。

おばあちゃんは、お店の品を買うつもりで、お金も持っていました。集会が終わったなら、買い物をするつもりでしたから。誰かが死ぬのを見たり、自分が死ぬなんて思ってもいなかったのです。……市役所に近づくと、おばあちゃんは市長の名を呼びました。返事はなく、代わりに軍曹と大佐が市長は不

在であると告げました。でも嘘でした、市長はオフィスに隠れていたのです。

大佐は、おまえたちの場所が墓場にあると言って、一から三まで数えました。市長が手を掲げると、銃が火を噴き始めました。最初におばあちゃんが撃たれました。一撃では死なず、立ち上がって、手を掲げ、「なにを考えているの、なんで私たちを殺すの、争うためにきたのではないの、和解のために来たのに」と言いました。「なんで私たちを殺すの、ただちよつと土地が欲しいだけなのに」と言っているときに、次の一撃がやってきました。再び立ち上がり、「私を殺さない」、と叫ぶと、一人の兵士がやってきて、顔から足まで撃ちまくりました。おばあちゃんは、亡くなりました。私は、こわくて頭を伏せていましたが、三人の遺体の下敷きになりました。流れる血が私の顔を染め、子供の泣き叫ぶ声や痛みを訴える大人の声を聞きました。

すべてが終わると、兵士は生き残ったものはいないか、確かめにやって来ました。死んだふりをしていた私に触れ、「かわいそうに、この娘は死んでいる」と言って立ち去りました。それから私は顔をあげて、まわりに兵士がいなことを確かめて、立ち上がって逃げました。でも兵士は通りの角角にいました。五人の兵士が銃を撃ち始めました。どうなったのかわかりませんが、ピストルからは煙がたちのぼっただけでした。私は道の反対に逃げました。そこには土盛りがあり、逃げました。ただ痛みで叫ぶ人たちの声が聞こえました。……」

グアテマラ法人類学協会は、当時の警察署長と市長が署名した、市役所の死亡関係書類を調査し、広場の惨劇の犠牲者が二四名にのぼることを突き止めている<sup>16)</sup>。その日の午後、遺体は、市役所のトラックで墓地に

隣接した場所に運ばれた。この点は、すでに元署長の証言を紹介した。パワーシヤベルで、穴を掘り、遺体を埋めた。しかし、後に触れるように、グアテマラ法人類学協会による証言収集と発掘は、二四名のほかに、惨劇の数時間後に亡くなった十一名が併せて埋められたことを明らかにしている。十一名のうち、一名は、翌日、病院で亡くなった人物であり、いったん閉じた穴を再度掘り、遺体を埋めたと考えられる。ただし、この十一名の死亡についての公式記録は残っていない。

#### 惨劇の続き

しかし、惨劇は、この一度にとどまったわけではない。広場での虐殺の後、しばらくは軍による逃走住民の追跡が行われ、リンチや殺戮は後を絶たず、恐れをなした彼らは、森の奥深くに逃げ込んだ。また川を渡るうとした人々の中には溺れ死んだものも数知れなかった。

「山に行こうとしたところ、ヘリコプターが私たちの上空を飛んでいました。私たちが捜していたのです。みんな逃げましたが、溺れ死んだ者もたくさんいました。ヘリコプターは私たちを捜し、殺そうとしていたのです。だから山の中に隠れました。雌鳥みたいでした。兵士たちがやってくると、逃げだしましたし、走りまわりました。……」。(証言 No.2 1997/9/6 FAFG)

事件の後、軍は増強され、市に駐留し続けた。人々は、数週間もの間、軍への恐怖から市に戻らず、森に逃げたため、病気や毒蛇によって死を余儀なくされる者もいた。また元警察署長や市の有力者が、理由はど

うあれ、軍の一掃作戦に協力したとの証言も多い。

「夜明け前にラディーノとケクチ話者の連中が家にやってきました。ケクチの連中は私たちのようにしゃべるから、この土地のケクチだとわかりますが、顔をハンカチで隠していました。ラディーノは顔を隠してはいませんでした。私を床に倒しました。夫は縛りあげられ、足で蹴られ、銃尾でなぐられました。そうして夫は連れ去られました。そこにはカンチュ・アシグもいました。その後、夫は二度と姿をみせることはありませんでした」。(証言 No.2 1997/9/6 FAFG)

「男たちが私の娘の家にやってきて、家の前に一列に並ぶように言いました。皆、とてもこわがっていました。娘には赤ん坊がいましたが、彼らは、赤ん坊をそばの川に投げ捨てました。手足を縛り、それから川に投げ入れたのです。二週間前には、息子がヘリコプターで連れていかれ、娘が殺されたことも後で知りました。私にはつらい出来事でした」。(証言 No.1 1997/9/7)

こうした軍事作戦により、一九七八年から八三年までの間で、パンス市役所に記された犠牲者の数は二二二一名に上った<sup>17)</sup>。大量殺戮の後は、選択的殺戮が行われたことがわかる。悲惨な時代であったとしかいいようがない。



写真2 パンソスの秘密墓地の発掘（モスコソ撮影）

#### 秘密墓地の発掘

これだけの惨劇を繰り返した場所ながら、グアテマラ法人類学協会によって確認できた遺体は、広場の集団殺戮関係のものに限られた。広場より南に三二〇メートルの場所に、パンソス市の共同墓地がある。道路から斜面が始まり、墓域を越えた隣接地に秘密墓地があった。後段で述べるように、ここには現在、慰霊のモニュメントが築かれている。

発掘により、八・九メートル×五メートルの穴と小さな穴が見つかり、前者からは三四体の遺体が、後者からは一体の遺体が出土した<sup>19</sup>。大型の穴の場合、遺体同士は、間隔を開けるように並べられ、重なってはいなかった（写真2）。手足を伸ばし、仰向けのものがほとんどであった。遺体のほかにも、水筒、肩掛け袋、帽子、装飾品、靴、木製の棒などが見つかっているが、広場の惨劇で残されたものをまとめて埋めた可能性があり、犠牲者の所有物とはいいきれない。

犠牲者の多くは男性であり、一九歳から二九歳まで

の青年層が多かった。しかし、幼児や老年層も含まれ、殺戮が無差別であったことを物語っている。遺体は、腐敗が激しく、わずかに六パーセントしか、本人を特定することはできなかった。遺体に加えられた打撲の痕跡は、保存状態が悪いこともあり、一七パーセントの確認にとどまっている。肉眼による弾痕は二九パーセントの遺体で確認され、X線による解析では五一パーセントの遺体で確認されている。いずれにせよ、証言が裏付けるように、これらの遺体は、広場の惨劇の犠牲者である可能性はきわめて高いことになる。

#### 4 コミュニティ・ミュージアムの建設

##### プロジェクト組織

事件の現場であるパンソス市に博物館を建設したのは、モスコソが率いるNGO組織「平和のための歴史化」である。この組織は、他の三つのNGOとともに人権コンソーシアム（Consortio de Derechos Humanos）を結成し、ハ中米グアテマラ、アルタ・ベラパス県の三市に位置する内戦被害にあった共同体における平和の文化と社会的和解の推進（Promoción de una cultura de paz y reconciliación social en comunidades afectadas por el conflicto civil en tres municipio del departamento de Alta Verapaz, Guatemala, Centroamérica）と名付けたプロジェクトを、EUの財政的支援の下で、二〇〇二年三月より開始し、二〇〇五年二月に終了している<sup>19</sup>。他の三機関とは、全体の財政を管理したイタリアの組織「国際協力（Cooperazione Internazionale）」、社会復興のため、未亡人や親を失った子供たちなど内戦犠牲者の遺族組織作りをプロジェクトの核としたハリゴベルタ・メンチュウ・トゥム財団（Fundación Rigoberta Menchú

Tum)∨、そして、内戦や虐殺のトラウマからの回復を専門とするハコミュニティ研究と社会心理活動グループ (Equipo de Estudios Comunitarios y Acción Psicosocial)∨である。

この中で、△平和のための歴史化∨は、記憶の歴史化を中心に据えた活動を実施した。以下は、このNGOの活動に限って話を進める。人権コンソーシアムの活動全体にあてはまるかもしれないが、モスコソラの活動の根拠は、一九九六年にグアテマラ政府とグアテマラ民族革命連合との間で締結され、現在に至るまで社会復興の基盤となっている和平協定に記されているという<sup>20</sup>。協定の第一条△概念∨の第四項には、「内戦下で起きた人権侵害や暴力行為についての真実を知ることが、グアテマラ国民の権利である。客観性と公平性をもって、事実を明らかにすることは、国民の和解とこの国の民主化の過程の強化に寄与することになる」とあり、また、同じく第五項には、「先住民のアイデンティティと権利を確認することは、多民族、多文化、そして多言語で統合される国家の民を作り出すための基礎である。すべてのグアテマラ人の政治的、文化的、経済的、そして精神的権利を敬い、行使することは、国民の多様性を反映した共生の基礎となる」と記されている<sup>21</sup>。

これらの理念の下、三年間にわたってNGO△平和のための歴史化∨が実施した記憶の回復プロジェクトは、大きく五つのサブプロジェクトより構成された。コミュニティ・ミュージアム(以下博物館と呼ぶ)の建設、虐殺追悼モニュメントの建設、虐殺の記憶を残すための壁画制作、土地闘争の経緯を記したプレート設置、そして虐殺の証言を集める作業がそれらにあたる。それぞれをもう少し詳しく見ていこう。

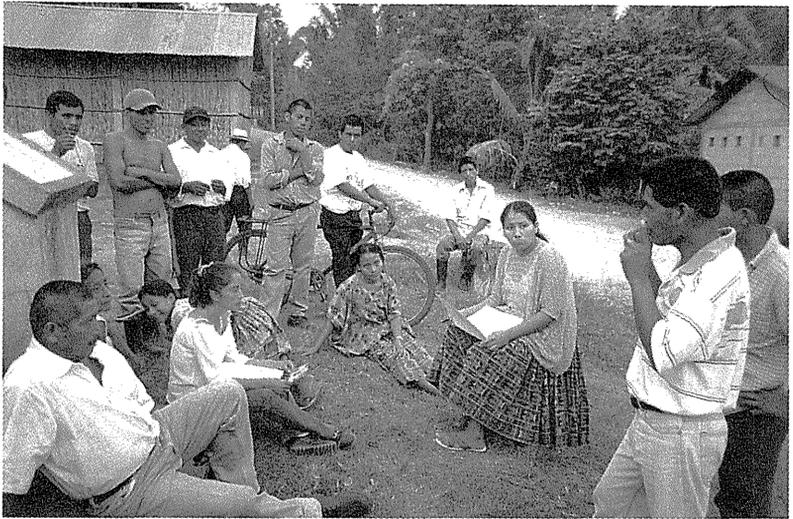


写真3 <平和のための歴史>によるインタビュー調査風景 (Historial para la Paz所蔵写真、2002年)

博物館と住民参加型ワークショップ

博物館の建設は、これらの中でも彼らが最も力を注いだ案件であった。それだけに準備は用意周到に進められた。まず一年目(二〇〇二〜二〇〇三年)には、パンソス市ばかりでなく、サンタ・マリア (Santa Maria)、カアボンシット (Cahaboncito) など周辺の村々を訪れ、スペイン語で記した質問票をベースに、ケクチ語通訳を介しながらインタビューを重ね、社会文化、宗教などの一般的情報のほか、内戦下で被った被害の実態を把握し、大量殺戮など、暴力の記憶を住民から聞き出した(写真3)。

また集会を各市や村で開催するなどして、プロジェクトの趣旨説明に尽力を注いだ。さらにパンソス市の守護聖人サンタ・ロサ・デ・リマの祭礼にあたる、二〇〇二年八月二七〜三〇日には、パンソス市内の日常生活をとらえた写真展(二一世紀のパンソスVを村の一角(現在の博物館の外廊下)で開催し、歴史や文化を保存する大切さを訴えた。

年次報告書には記されていないが、こうした活動と並

行して、モスコソらは、パンソス市役所に保管されていた出生記録、死亡記録などにもあたり、大量殺戮の事実をとどめる公文書の発掘を試みている。しかし、公文書の中には改竄されていたものもあり（同色のペンによる徹底した上書き）、また女性の記録に関しては、元来、女性が記録を残す、あるいは女性の記録を残そうという習慣に乏しかったことなどの理由から、成果はほとんど得られなかったという<sup>(8)</sup>。

こうした記憶を掘り起こす作業自体が、博物館の展示内容を当初から決めていたことを意味するというのなら、いささか短絡的な解釈といわざるをえない。というのも、当初の計画と毎年度末に提出された報告書の内容とずれが生じていることが読みとれるのである。変化を生じさせたのは、展示に関して、彼らが採用した住民参加の方法であったと考えられる。もちろん住民参加自体は、博物館建設（設立）や維持管理や活動に欠かせない要素として、当初の計画から存在していた。

具体的には、まず、対象を限定しない呼びかけに対して、賛同の意を表明した住民を、一年以上にわたり、ワークショップに招聘し、博物館の基礎的知識の教授や意見交換を始めたのである。これにより、一名の住民が選抜され、彼らによって新たなNGO組織（パンソスの歴史化委員会（Comité de Historia de Panzós））が結成された。彼ら組織構成委員は、歴史の推進者（Promotores Históricas）と名づけられた<sup>(9)</sup>。モスコソらのNGO組織は、パンソスの歴史化委員会に助言を行う立場にあった。なお、歴史の推進者Vは、三年のプロジェクトが終わるまでに若干の出入りがあり、最終的には、一三名に増加している。パンソス市からは、初等教育学級の若手教師が九名、サンタ・マリア村、カアボンシット村からは、それぞれ二名ずつの若者がメンバーとなった。一人の混血ラディーノの女性を除き、他のメンバーは、いずれもケクチ系のマヤ系先住民である。とくに後者の二村に関しては、事前の村落調査の結果、村の自治組織で



写真4 〈歴史の推進者〉が参加したワークショップ風景（Historial para la Paz所蔵写真、2004年）

ある共同体委員会による参加者の推薦が必須と判断され、それに従ったという。<sup>25</sup>

#### ワークショップと展示

三年間で通算一五回に及んだワークショップは、三カ月に一回程度、半日ほどの時間を費やし、パンソス市に置いた人権コンソーシアムの事務所で開催された。歴史の推進者の中には、スペイン語を解しないケチ語話者がいたことから、通訳も同席した（写真4）。ここでは、博物館活動で必要な基本的な用語や概念を、モスコソらが丁寧に解説することから始められ、やがて歴史の推進者自身も歴史や文化についての記憶を回復し、記録していく方法を、実習を交えながら修得するにいたった。<sup>26</sup>

さらに、こうした段階的作業をこなすかたわら、モスコソらは、首都にある国立考古学民族学博物館や国立歴史博物館、子ども博物館に歴史の推進者を派遣し、博物館の多様性を学ぶ機会を提供している。こ



写真5 開館式でテープカットを行うマリア・マキン女史(左)(Historial para la Paz所蔵写真、2005年1月29日)

うした博物館見学は二年目以降も続き、バハ・ベラパス (Baja Verapaz) 県サン・ヘロニモ (San Jerónimo) 市のサトウキビ博物館や、グアテマラで最初の虐殺資料を展示した同県のラビナル (Rabinal) 博物館などのコミュニティ・ミュージアムも訪問先に選んだ。<sup>28)</sup>

二年目以降も引き続きワークショップを通じた研修が行われ、展示場所も、新しい建物を建設する代わりに、パンソス市役所が所有する建物の一角を無償で借り受けることで目処がついた。やがて、三年目に入ると、展示空間に応じた形での展示計画がワークショップの中で議論された。こうして、できあがったのが、三本の展示の柱であり、モスコソらが当初、描いていたものとはいささかずれていた。すなわち、住民自身の選択が働いたといえよう。三つの柱とは、地域の歴史、文化、そして自然であった。<sup>29)</sup>

さらに三本柱に従ってメンバーも三分割され、

それぞれのグループに対して、資料収集の課題が与えられた。歴史であれば、古写真、文化であれば、日常生活用具や衣装、宗教、言語、そして自然であれば、野生の動植物から栽培植物まで多岐にわたった。<sup>29</sup> これらの情報と展示品の収集活動と並行して、モスコソが当時館長の職にあった国立考古学民族学博物館に所属する学芸員らを、ワークショップに招き、収蔵品の登録方法、来館者へのガイドなど、さらに高度な知識の修得にも努めた。<sup>30</sup>

残された大きな課題は、ワークショップと並行して、モスコソらの NGO 独自で調査し、集めた内戦下の殺戮の証言や記録を展示にどのようにして接合できるのか、あるいは断念するかであった。少なくともモスコソら NGO 側は、生々しい大量殺戮について、プロジェクトの最大の目標としていたものの、どこまで展示で触れるべきか、判断に躊躇していたという。とこ



写真6 バンソス・ミュージアム外観（関雄二撮影、2006年）

るが、彼らの危惧に反して、△歴史の推進者▽は、積極的に取り込むことを主張したのである。<sup>(註)</sup> こうして、博物館展示の骨格は固まり、最終年度には、展示ケースやパネルなどの制作に専念できるまでになった。設計や材料および展示具の入手と制作は、首都在住の専門家や工房に依頼し、現地で、モスコソらのNGOと△歴史の推進者▽が組み立てた。まさに完成するまでの過程を含め、共同制作といえよう。博物館の名も、ワークショップにおいて△パンソス博物館▽とすることが決まり、二〇〇五年一月二十九日に博物館は開館となった(写真5、6)。

## 5 博物館展示の完成

貸与された面積は、約八メートル×五メートルの小さな空間である(写真7)。このうち、およそ三分の一にあたる奥の空間は、NGO△パンソスの歴史化委員会▽のオフィスにあてられている。展示空間に仕切はとくに設けられていないが、すでに触れた三つのテーマは明確に表現されている。導線は右方向に設定されており、入口付近には、パンソス市の位置を示した地図や航空写真が置かれ、それに続いて、最初のテーマである△自然▽関係の展示が登場する。付近に生息する野生の動物や植物、そして果実や穀類など農作物、そして菓草の写真パネルが据えられる。興味深いのは、二種類の展示方法である。一つは各パネルに小さな取っ手を取り付け、それを引きあげると、裏面のスペイン語による説明が読めるという仕掛けである。もう一つは、複数のパネルを張り付けた縦に細長い基盤部分が水平方向に回転し、裏側に記されたテキストが読めるといふ工夫である。いずれも、ある意味でハンズオン形式のパネルといえよう。また穀類に関しては、

当初、実物をアクリル・ケースで展示していたが、保存処理をしていなかったため、虫害の被害にあい、現在は撤去されている。ケクチ語の説明は、テーマ解説のパネルに限られている。

△自然▽に続くテーマは△文化▽である。パンソスの現在の生活を示す多数の写真パネルや、この地域に典型的な木造家屋のミニチュア・ジオラマ、宗教的行事や言語分布地図のパネル、さらにはマリンバやハープなど楽器のミニチュア、機織り場面の写真と現物の織物などが展示されている。

最後のコーナーが△歴史▽である。古写真のパネルにより、二〇世紀初頭のパンソス地域の産業が示される。フィンカによるコーヒー栽培と輸送手段としての鉄道、そして大西洋岸の港に運ぶための船などがパネルに見える。こうした産業構造の提示は、すでに述べたように、やがてこの地域で起こる悲劇の歴史的背景を語る重要な部分である。

歴史コーナーの最後では、パンソスの大量殺戮がと



写真7 パンソス博物館の展示（関雄二撮影、2006年）

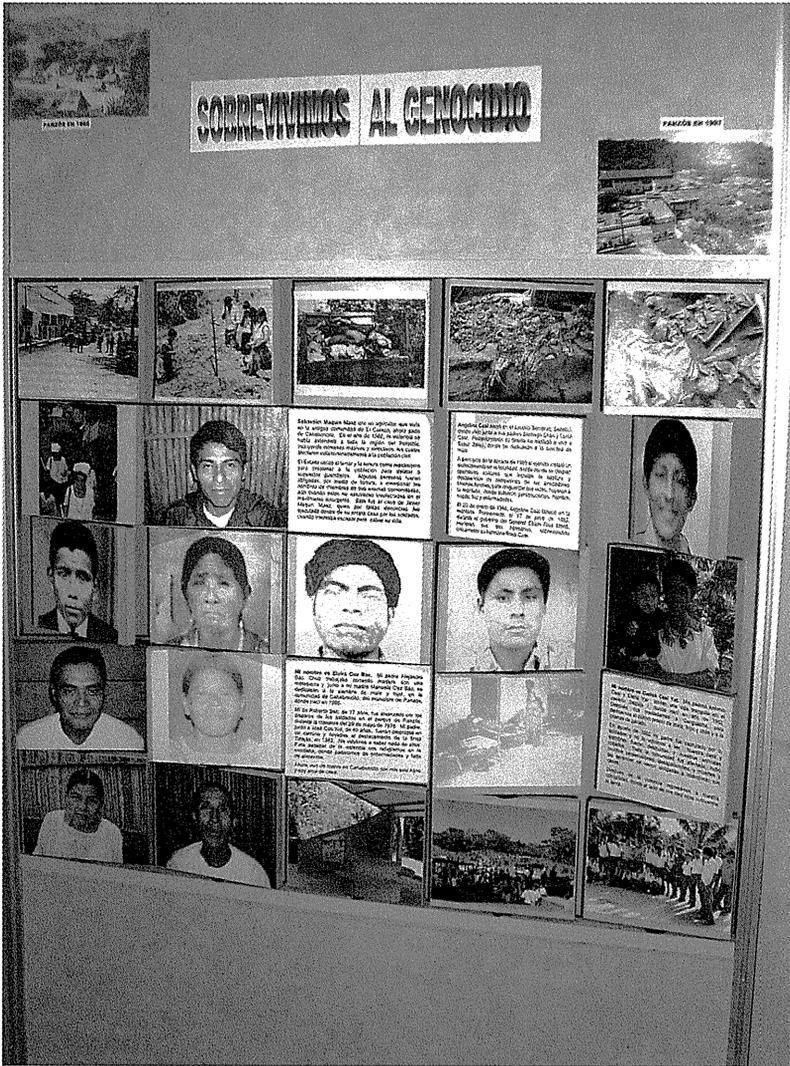


写真8 パンソス博物館の<虐殺の証言>展示 (関雄二撮影、2006年)

りあげられる。殺戮された人々の遺体を運ぶトラック、モスコソがかつて所属してグアテマラ法人類学協会  
が手がけた秘密墓地の発掘場面など、貴重な写真は事件を生々しく伝えているが、それ以上に印象的なのは、  
犠牲者の遺族、虐殺を免れた人々の証言パネルである（写真8）。先に述べたように回転式のパネルとなっ  
ており、犠牲者や生き残った人々の顔写真パネルを回転させると、裏面には、どのような体験であったのか、  
どのように殺されたなど、スペイン語で書かれた本人や遺族の証言を読むことができる。先にも紹介したマ  
リア・マキンの証言もある。なお事件全体を語る説明パネルに関しては、スペイン語ばかりでなく、ケクチ  
語の表記も認められる。こうした展示に関する評価は後段に譲り、次にNGO△平和のための歴史化▽が  
実施してきた他の三つのサブプロジェクトについて触れることにする。

## 6 モニュメントの建設

### 平和と寛容のためのモニュメント

一つは、内戦の犠牲者の記憶をとどめ、大量虐殺を逃れた生存者の尊厳を称えるために建設されたモニュ  
メントである。<sup>⑧</sup>△平和のための歴史化▽が、この計画をパンソス市の住民に投げかけると、直ちに反応を示  
した組織が現れた。パンソスに拠点を持つ△ミナス山脈、ポロチック谷における内戦犠牲者、未亡人、孤  
児、難民組織（Asociación de Víctimas, Viudas, Huelfanos y Desarraigados del Conflicto Armado Interno de la  
Sierra de las Minas y el Valle del Polochic; AVIHDESMI）であり、まさに内戦の犠牲者の集団であった。△平  
和のための歴史化▽との話し合いの中で、彼らが提案してきたのは、モニュメントとしての礼拝堂の建設で

あり、場所としては、一九七八年の大量殺戮の犠牲者が埋められた共同墓地を希望してきた。モスコソらは、墓地を管理する村役場に交渉し、許可を得るとともに、多湿環境を考えて、屋根を葺くが、側面壁を取り払ったオープンな空間にすることを逆提案し、納得を得た。<sup>33</sup>

こうして、虐殺された犠牲者がかつて無惨にも埋められた場所の真上に、モニュメントが建設された（写真9）。名前も、両組織が相談の上、ハパンソスの平和と寛容のためのモニュメント（El Monumento para la Paz y la Tolerancia de Panzós）と決められた。入り口にはかつて鉄道で使用されていたレールの一部を用いて作られた十字架が立っている。また、モニュメントに隣接して、マヤの儀礼を執り行うために、石を敷き詰めた円形祭壇が設けられた。モニュメントの除幕式は、プロジェクト二年目にあたる二〇〇三年一月二十九日であった（写真10）。

なおモニュメントの内部空間には、宗教を問わず利用できる、楕円形の立体的祭壇が設けられ、壁面に

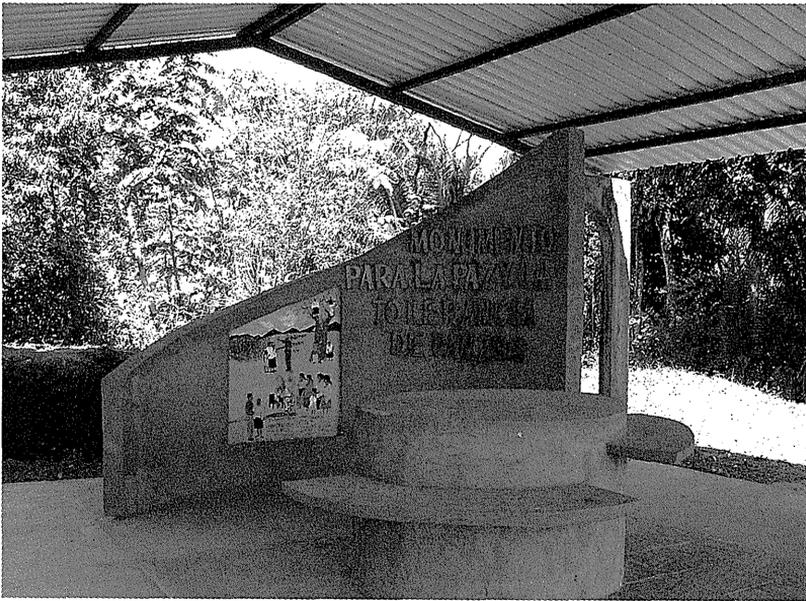


写真9 パンソスの平和と寛容のためのモニュメント（Historial para la Paz所蔵写真、2003年）



写真10 モニュメント除幕式に向かう人々 (Historial para la Paz所蔵写真、2003年12月29日)

は、農場主に抑圧され、内戦下、軍によって苦しめられた住民の姿が描かれた。絵のデザインは、アマナス山脈、ポロチック谷における内戦犠牲者、未亡人、孤児、難民組織Vのメンバーが、八平和のための歴史化Vが主宰するワークショップで考案し、制作にもあたった。壁画自体は、モニュメント建設に遅れること六カ月、二〇〇四年五月二十九日に完成を見ている。

#### 壁画制作

こうした壁画は、パンソスのモニュメントに限られたわけではなかった。別のサブプロジェクトの一つとして、やはり、軍によって村全体を焼かれ、徹底的破壊を受けたイサバル (Izabal) 県エル・エストルルセプル・サルコ (Sepur Zarco) 村における壁画制作がある。むしろこちらの方が早く完成している。セプル・サルコ村の組織「犠牲者集団 (El Grupo de Víctimas)」Vが、プロジェクトに参加する村のメンバーを選抜し、八平和のための歴史化Vは、グアテマラ国内全体で活動す

る組織へ犠牲者の子供たち (Asociación de Hijos) √ に委託して、壁画制作のワークショップを、二〇〇三年一月から翌年二月まで開催した。凶案はワークショップで考案され、全体の半分が、軍による破壊と森に逃げ込む住民の姿を、残りの半分が、内戦が終結し、再び村に戻ってくる場面にあてられた(写真11)。制作は△犠牲者集団√があたった壁画のためのスペースは、村の中心にあるセプル・サルコ農村小学校 (Escuela Rural de Sepur Zarco) の壁面が選ばれている。制作には二〇〇四年一月二三日から二五日までの三日間を要し、二月二日には、記念式典が挙行された<sup>(34)</sup>。

残りのサブプロジェクトは、パンソス市に属するカアボンシット村とサンタ・マリア村における記念板設置である。両村ともに、土地闘争に一部勝利した歴史を持ち、その出来事と村の設立が記念板に刻まれた。マヤの儀礼を伴う記念式典は、それぞれ、△平和のための歴史化√によるプロジェクト二年目に当たる二〇〇四年八月一〇日と一七日に執り行われた<sup>(35)</sup>。このほか、△平和のための歴史化√は、パンソスの村内を走る通りに、△平和通り (Calle de la Paz) √



写真 11 セプル・サルコ村の壁画制作 (Historial para la Paz所載写真、2004年)

の名を冠することを市役所に提案して実現させたほか、また内戦下の犠牲者の証言を徹底して集めるなど、一貫して記憶の回復に関わる活動に従事してきた。<sup>36)</sup>

## 7 記憶の回復と社会の復興

記憶の回復から生成へ

△平和のための歴史化▽の活動は、証言の収集から、博物館、モニユメントの建設まで多岐にわたり、しかも完成までに、地域住民とのワークショップを組み込むなど、規模はともかく、平和協定後のグアテマラで最も計画的、かつ内容の濃い△記憶の回復プロジェクト▽の一つであるといっても過言ではない。その意義は、単に忌まわしい虐殺、大量殺戮、選択的殺戮の記憶を留める装置を作り上げたというだけでなく、それ自体が、内戦後の大きな課題となっている社会のリーダー養成となっている点であろう。

先に述べたように、内戦下で、ゲリラや共産主義撲滅の名目で、政府や軍が行ったのは、社会運動のリーダーの抹殺であった。また、同じ地域の有力者や住民を手先に利用した軍事作戦は、地域統合どころが、分裂を引き起こす種となり、内戦後の社会復興を難しくさせていることもよく指摘される。こうした中で、モスコソらの活動は、博物館やモニユメントを地域の住民、とくに若者世代と共同で作り上げ、さらに博物館に関しては、維持管理活動を通じて、次世代のリーダーをつくりあげることに貢献したといえる。

しかしながら、これはいささか過大評価なのかもしれない。短期間ながらも、二〇〇六年より一年おきに三年にわたって筆者が実施してきたパンス博物館の調査は、初期の△歴史の推進者▽の熱気が続かず、次

世代リーダーを生み出す装置どころか、記憶の回復装置としても機能不全に陥っているという状況を筆者に見せつける結果となった。<sup>37)</sup>一年目の調査時には、筆者の到着を大歓迎した△歴史の推進者▽たちは、二年目以降は、ほとんど姿を見せず、市役所から派遣された、展示内容も説明できない守衛が一人、掃除も行き届いていない博物館の片隅に座っているだけという寂しい状況にある。

この原因の分析は慎重に行わなくてはならないが、一点だけ指摘するとすれば、次世代にこだわるあまり、結果的に記憶の回復が必要な当事者を除外し、展示される対象としてしまったことであろう。パンソスの虐殺後に生まれた若者が大半を占める△歴史の推進者▽らには、虐殺の記憶に対する関心、関係性があまりに希薄であったといわざるをえない。この点については、二年目に、マリア・マキンを含め、実際に虐殺の現場に居合わせ、証言を残した人々を招いてパンソス博物館で開いた会合の時に、強く感じた。

三〇年近くたった現在でも、涙ながら当時の様子を語り、自分らの村にもこうした博物館を欲しいと訴え、博物館の活動にも参加したいと意思表示を行う被害者の声と、「今は、教師の仕事が忙しくて、博物館にはほとんど来られない」と私に説明した△歴史の推進者▽とでは、記憶に対する距離感が違いすぎると感じざるをえないのである。

たしかに博物館の活動は、日常の生活とは異なる次元に位置し、さまざまな知識が必要である。だからこそ、数年かけてワークショップで鍛え上げ、共同制作を行っていく必要があった。そこでモスコソらが注目したのが、すでに一定程度の教育を積んだ若者であり、予想以上に吸収力は高く、実際に初期投資は実ったかに見えたのである。彼らが、ファシリテーター、インタープリーターとして博物館を訪れる人々を巻き込んでいきさえすれば、うまくいくはずであった。

△平和のための歴史化▽は、すでにこの停滞状況を受け入れ、虐殺犠牲者のグループと△歴史の推進者▽とが共同できる体制を模索中である。パンスのケースは、ジェノサイドなどの大量殺戮を経験した社会における記憶の回復と社会復興が、いまだにその方法をめぐって模索を続けている状況であることをわれわれに語ってくれている。それだけに、活動の情報の公開、冷静な分析の蓄積は、プロジェクトの当事者やわれわれ研究者に託された課題ともいえよう。

## 8 記憶の生成過程の行方

### 集団的犠牲と個の死

最後に、△平和のための歴史化▽の活動をより広い文脈に位置づけておきたい。フランスの社会学者アンリ・ピエール・ジュディ (Henri-Pierre Joudy) は、フランスとイタリアを結ぶモンブラン・トンネル内で起きた交通事故で亡くなった五〇名以上の犠牲者を追悼するモニュメントや第一次世界大戦で戦死した軍人を葬ったヴェルダン (Verdun) 軍人墓地をとりあげ、数の多さとその一体化、そして視覚化こそが、訪問者に集団の運命の無差別性、集団的犠牲を想起させると指摘している。<sup>39</sup>

パンスの博物館は、規模が小さく、展示も虐殺に特化していない点で、ジュディの指摘するような集団的犠牲を想起させる装置としては弱い。しかし、△パンスの平和と寛容のためのモニュメント▽は、村の共同墓地を見下ろす丘の斜面に隣接して建てられており、そこにあった秘密墓地から収容された犠牲者の遺体の一部は、墓地にも埋葬されている (写真10)。墓地に眠る死者のすべてが殺戮の犠牲者ではないが、十

字架が立ち並ぶ墓地とモニュメントとは一体化し、集団の死を象徴しているように見える。村内の八平和通りVの命名とともに、小規模ながら、集団的犠牲に思いを馳せる仕掛けができあがっているのである。

一方で、こうした集団的犠牲の強調は、個人の犠牲、個人の死を覆い隠してしまう点もよく指摘される。フランスのカーン(Caen)市にある第二次世界大戦を展示した平和記念館を考察対象とした脇田健一は、「通常、近代国民国家は、「死」の意味をそのままにはしておかない。近代国民国家の枠組みないしは秩序が動揺しないよう、「死」の意味を「国」という集合的V記憶のなかに回収していく。」と述べている<sup>39</sup>。先にジュディがとりあげたヴェルダン軍人墓地に埋葬された戦死者は、国家のために犠牲になった一兵士の死として抽象化されてしまうという。

さらに脇田は、第二次大戦末期、ノルマンディー上陸作戦直後に、ナチスのSS隊によって六四二二人もの人々が虐殺されたオラドゥール・シュール・グラン(Oradour-sur-Glane)村での事件にも触れる。この虐殺に手を下したSS隊の中にフランス領内のアルザス出身兵が含まれていたため、戦後、フランス国内で裁判が起こされたが、最終的には元アルザス出身兵に特赦が与えられた事件である。脇田は、特赦を近代国民国家の中で生じた矛盾を解決する手段であるととらえている。さらに、この事件を展示するオラドゥール村のメモリアルセンターの役割についても、犠牲者を大戦の殉教者として扱っている点で、近代国民国家の枠組みに絡め取られており、生き残ったオラドゥールの人々の怒りは宙に浮いている、と指摘する<sup>40</sup>。

パンスの事件に簡単にはあてはまらないが、本書でモスコソがとりあげたように、自警団が、同じ先住民系、同じ領域、同じ村の人々の虐殺に手を下した例となると、脇田の論でとりあげた事例に似ていないこともない。しかし、決定的に異なるのは、グアテマラの場合、国民国家といえども、その集合的V記憶と

して確固たるものがどこまで存在するのが疑問なのである。もつとも、和平協定の締結が一九九六年であることを考えれば、内戦はいまだに直近の出来事であり、第二次世界大戦のような総括がなされていないのは無理もない。言い換えれば、△集団的▽記憶も個人の記憶も生成過程にあるのかもしれない。

#### 公的な記憶とヴァナキュラーな記憶

同じような暴力の時代を経験し、二〇〇三年に△真相究明と和解委員会▽の最終報告書が提出された南米のペルーを研究する細谷広美は、フランスの国民意識を考察したピエール・ノラ (Pierre Nora) を引用し、現在のペルーは、公的な歴史 (Official History) が構築されることと並行して、大きな歴史の全体像の中で、個々の経験や記憶を位置づける作業が開始されたと述べている。<sup>41)</sup> 時間的に見れば、グアテマラの方が、このプロセスの開始が早いのかも知れないが、ペルーも同じような記憶の歴史化の過程にあることは間違いない。

細谷の言う公的な歴史にせよ、脇田の言う△集団的▽記憶にせよ、国家など権力者側が保有する、あるいは保有しようとする記憶や歴史は、強固なものではあるが、不変ではない。キャロル・グラック (Carol Gluck) は、日本における従軍慰安婦問題をとりあげ、記憶の領域を四つに区分している。<sup>42)</sup> 公式な記憶、ヴァナキュラーな記憶、私的な記憶、そしてメタな記憶がそれらであり、相互に関係し合っているという。

ヴァナキュラーな記憶とは、マスメディアや大衆文化、NGOなどの△記憶の活動家▽を通して記憶を消費し続ける領域であり、こうしたヴァナキュラーな記憶が生成される中で、私的な記憶としての各個人の体験や記憶が位置づけられ、整理されていく。最後のメタな記憶とは、ヴァナキュラーな記憶が社会で表明されることにより、これまで無関係、無関心であった人の中にさえ、記憶が生成されていくことを指す。

グラッグが指摘するのは、こうした四領域のダイナミズムであり、とくに公式な記憶さえ屈服させるヴァナキユラーな記憶の領域である。この見方を援用するならば、△平和のための歴史化√の活動は、私的な記憶の領域と関係しながらも、大枠ではヴァナキユラーな記憶の領域に属し、大量殺戮を認めていない公式な記憶への異議申し立てを行っているともいえる。公式な記憶が、「記憶にない」「記憶として認められない」という立場であるならば、それを突き崩す動きであるともいえよう。そしてこの活動の中で、私的な記憶は大きな歴史の中に位置づけられ、さらには、いずれ活動が活発化すれば、メタな記憶の生成にも参加できよう。

もちろん、現状を、こうした二項対立的な記憶のせめぎ合いとしてとらえることには異議もある。グアテマラにおける政治的暴力をいかに文化人類学的に記述し、実践と結びつけていくか、悩みつつも試行を繰り返す池田光穂は、物理的暴力を権力の基盤に結びつけるような従来の議論、あるいは被害者と加害者という二項対立を前提に、内戦下での出来事をとらえることを拒否している<sup>49</sup>。生死の問題を扱う微妙なフィールドでの聞き取り調査を行うことの困難さは承知の上で、自らの調査の説明責任と相手に対する応答責任を前提に、暴力事件をめぐる構成的当事者の語りを聞き、自らもその構成的当事者として関わりという方法を池田は選んでいる。これにより、他者理解にとどまってきた人類学を実践の場へ移すことができ、さらには処罰や恩赦が実施される公正の社会的建設や紛争の解消に寄与する可能性があるという。この見方に立つならば、展示にせよ、モニュメントの建設にせよ、被害者と加害者という二項対立を無条件で設定すること自体が危うくなり、△公式な記憶√対△ヴァナキユラーな記憶や私的な記憶√という構図も意味を持たなくなる可能性がでてくる。

この態度は、先述した脇田の論でも展開されている。「近代国民国家が用意する『われわれ』や『あいつら』という枠組み、(中略)、あるいは『正義と悪の図式』『戦争の不条理』『世界平和』といったステレオタイプ化された図式や言葉、そのような外部から押し寄せ秩序化しようとする力に取り込まれない、『わたし』や『あなた』の記憶を保存する自由、そしてその方法とは、どのような形で可能なのかと問いつづけることこそが重要なのである」<sup>49</sup>。

パンスノスの博物館に対する NGO へ平和のための歴史化▽、△歴史の推進者▽、そして虐殺の犠牲者らの行動や意識の差は、まさにこうしたプロジェクトのアクターの多様性を示すものであり、研究者としては、こうした多声の民族誌なり展示を追究すべきなのかもしれない。しかし、同時に多少の違和感も残る。近代西欧的な二項対立的な原理や幻想で満ちあふれた裁判や補償、そして和解という世界に、この種の研究が具体的にどのような切りに切り込んでいくことができるのかが見えてこないからである。公式な記憶が黙り<sup>だんま</sup>を決め込み、大量殺戮の犠牲者に対する補償がほとんど実行されていない現状では、まずは、ヴァナキュラーな記憶の活動により、公式な記憶と対話し、交渉を始めることは、必要な手段ではなからうか。少なくとも、ヴァナキュラーな記憶を主張したいと望む人々が、実際に行動しうる場と空間を設けることこそ、多様な声を保障することにつながっていくと考えられる。その意味で、私的な記憶の位置づけを行う場としてのコミュニケーション・ミュージアムやモニュメントを築くことの意義は大きい。

## 【注】

(一) Fundación de Antropología Forense de Guatemala, *Informe de la Fundación de Antropología Forense de Guatemala: Cuatro*

*casos paradigmáticos solicitados por la comisión para el esclarecimiento histórico de Guatemala*, Editorial Serviprensa C. A., Guatemala, 2000, p.32.

なか、グアテマラにおける地方行政組織は、県 (Departamento) 市 (Municipio) 市の他慣習的な単位である村 (Pueblo) 以下 Villa, Aldea, Caserío, Cantón などを含む。Santa María, Cahabonico などの caserío であるが、本論では村と称して扱う。また、インテロの場合、市の中核であるため、首長や役職は市長、市役所と記載する。

(2) Moscoso, Fernando, Museos comunitarios para la paz de Guatemala. El caso de Panzós, paper presented at the International Forum "Social Reconstruction in Post-genocide Guatemala", National Museum of Ethnology, Osaka, p.1.

(3) Sanford, Victoria, *Buried Secrets: Truth and Human Rights in Guatemala*, Palgrave Macmillan, New York, 2003, pp.54-55.

(4) Jonas, Susanne, *The Battle for Guatemala: Rebels, Death Squads, and U.S. Power*, Westview Press, Boulder, 1991, pp.13-20.

(5) Jonas, op. cit.

(6) Fundación de Antropología Forense de Guatemala, *Informe de las investigaciones antropológicas forenses e históricas. Realizadas en las comunidades de Panzós, Belén, Acul y Chel*, Editorial Serviprensa C. A., Guatemala, 2000, pp.32-33.

(7) Jonas, op. cit., pp.21-39.

(8) Fundación de Antropología Forense de Guatemala, op. cit., p.35.

(9) Jonas, op. cit., pp.41-42.

(10) Jonas, op. cit., pp.57-71.

(11) Fundación de Antropología Forense de Guatemala, op. cit., pp.35-36.

(12) Sanford, Victoria, op. cit., pp.55-56.

(13) Fundación de Antropología Forense de Guatemala, op. cit., p.36.

(14) 文化の証人 44 Fundación de Antropología Forense de Guatemala, op. cit., pp.36-44 44。証人たちの証言集。

(15) Historial para la Paz 44 証言者の証言。

(16) Fundación de Antropología Forense de Guatemala, op. cit., p.42.

(17) Fundación de Antropología Forense de Guatemala, op. cit., p.47.

(18) Fundación de Antropología Forense de Guatemala, op. cit., pp.48-69.

(19) Consorcio de Derechos Humanos, *Informe Narrativo del Proyecto: Promoción de una cultura de paz y reconciliación social*

- en comunidades afectadas por el conflicto civil en tres municipios del departamento de Alta Verapaz, Guatemala, Centroamérica, 2005.*
- (20) ホスロン・インタビュー (2008/2/28)
- (21) Universidad Rafael Landívar / Misión de Verificación de las Naciones Unidas en Guatemala (MINUGUA), *Acuerdos de Paz*, Guatemala, 1997, p.416.
- (22) Consorcio de Derechos Humanos, *Informe Narrativo del Proyecto: Promoción de una cultura de paz y reconciliación social en comunidades afectadas por el conflicto civil en tres municipios del departamento de Alta Verapaz, Guatemala, Centroamérica, 2003*, pp.11-12.
- (23) ホスロン・インタビュー (2008/2/28)
- (24) Consorcio de Derechos Humanos, op.cit., pp.12-13.
- (25) ホスロン・インタビュー (2008/2/28)
- (26) Consorcio de Derechos Humanos, op.cit., pp.12-13.
- (27) Consorcio de Derechos Humanos, op.cit., p.13, 44-45. Consorcio de Derechos Humanos, *Informe Narrativo del Proyecto: Promoción de una cultura de paz y reconciliación social en comunidades afectadas por el conflicto civil en tres municipios del departamento de Alta Verapaz, Guatemala, Centroamérica, 2004*, p41.
- (28) Consorcio de Derechos Humanos, op.cit., p.28.
- (29) ホスロン・インタビュー (2008/2/28)
- (30) Consorcio de Derechos Humanos, op.cit., p.23.
- (31) ホスロン・インタビュー (2008/2/28)
- (32) ホスロン・インタビュー (2008/2/28)
- (33) ホスロン・インタビュー (2008/2/28)
- (34) Consorcio de Derechos Humanos, op.cit., p.17.
- (35) Consorcio de Derechos Humanos, op.cit., p.18.
- (36) 証言「関し」は、三年間(二〇〇三)の証言を集めて(ジュリア・マルティネス・マリーネズ) (Julia Argentina Martinez Guerra 私信)
- (37) パンソンス博物館については、本論執筆者(二〇〇四年、二〇〇五年、二〇〇六年)いずれも短期間の調査を実施した。

博物館の記述は、△平和のための歴史化▽による報告書や図面のほか、現地調査における観察が含まれている。

- (38) ジュデイ、アンリ・ピエール、斎藤悦則訳「カタストロフィの記憶」(荻野昌弘編『文化遺産の社会学』新曜社、二〇〇二年)、七二頁。

- (39) 脇田健一「記憶の政治」(荻野昌弘編『文化遺産の社会学』新曜社、二〇〇二年)、一〇一頁。

- (40) 脇田、前掲書、一〇四—一〇八頁。

- (41) 細谷広美「暴力の時代の歴史化をめぐる断章—証言と余白—」(関雄二・木村秀雄編『歴史の山脈—日本人によるアンデス研究の回顧と展望—』国立民族学博物館調査報告五五号、二〇〇五年)、一九七頁。ピエール・ノラ編『記憶の場—フランス国民意識の文化』社会学(一)谷川稔監訳、岩波書店、二〇〇二年。ペルーの場合、暴力の時代の後半部に政権を担ったアルベルト・フジモリ元大統領やその側近が訴追、収監され、部分的にせよ前政権および現政権による責任追及が行われたが、グアテマラの場合、大量虐殺の責任者の処罰は、ほとんど行われておらず、また当時の大統領も終身国会議員として政界に影響を及ぼしている点で、内戦を省察するような△集団的▽記憶や△公的な歴史▽の生成には困難が伴う。なお、細谷は Official History を公的な歴史と訳しているが、これとは別に、公的記憶 (Public memory) という用語も存在する。この場合は、むしろヴァナキュラーな記憶のように、多様な記憶を指すことが多い。この点は、田川泉『公的記憶をめぐる博物館の政治性—アメリカ・ハートランドの民族誌—』、明石書店、二〇〇五年、が詳しい。

- (42) キャロル・グラック「記憶の作用—世界の中の△慰安婦▽」梅崎透訳、(小森陽一他編『岩波講座近代日本の文化史(八)感情・記憶・戦争一九三五—五五年』、岩波書店、二〇〇二年)、一九—二三四頁。

- (43) 池田光穂「政治的暴力と人類学を考える—グアテマラの現在—」(社会人類学年報) 二八巻、二〇〇二年、二七—五四頁。
- (44) 脇田、前掲書、一一—一二頁。

### △追記▽

本書の校正中の二〇〇九年二月二六日、△平和のための歴史化▽より筆者に連絡があった。何らかの政治的理由により、パソス市は、博物館として貸与していた部屋を接収し、展示品や展示具を倉庫に移したという。展示具は破壊されている模様である。これに対して△平和のための歴史化▽は、内戦犠牲者組織と

もに、展示関係品の回収に向けて動き出した。虐殺の記憶をとどめる作業がいかにも難しいことなのかを示す事態といえる。